

## 前田長太訳『パスカル感想録』解題

広 田 昌 義

この書物は次の体裁の下に、大正三年一月二十三日、東京 洛陽堂から出版された。

外題：パスカル感想録 前田長太訳。

内題：仏国 ブレーズ・パスカル原著／法  
学博士 浮田和民序／前田長太訳／  
パスカル感想録／東京 洛陽堂。  
えび茶色布表紙 A 5 版。

内容は次の通りである。

扉に、Blaise Pascal の立像の銅版画<sup>(1)</sup>と Recueil des Pensées de Pascal. (f. fr. 9202 de la Bibliothèque Nationale) p. 347. (「二つの無限」の断章草稿の一枚目)の写真各一葉。浮田和民(当時早稲田大学法学部教授)の「序」が三頁。猪狩史山(歴史家)の「序」が二頁。訳者前田長太の「例言」が十三頁。「パスカル感想録目次」が六頁。「パスカル感想録」本文が四百八十頁。奥付あり。

前田長太訳『パスカル感想録』は、従来、Blaise Pascal の《Pensées》の最初の邦訳とみなされてきたが<sup>(2)</sup>、じつは明治 43 年、広瀬青波によって、《Pensées》の断章が相当数まとめて翻訳発表されているので、いわゆる本邦初訳の栄は、広瀬青波訳『パスカルのパンセ』に対して与えられるべきであろう<sup>(3)</sup>。しかし、前田長太訳『パスカル感想録』は Blaise Pascal の思想的概貌を日本で初めて紹介したという点で重要な価値をもつと考え

られる。すなわち《Pensées》を構成している約 1000 の断章のうち『パスカル感想録』に翻訳・収録されているのは 400 の断章にも足りないとはいえ、前田長太はそれらの断章に、ある秩序を与えて構成し、読者に《Pensées》の概容をうかがわせることに相当程度成功している。それに加えて、Pascal の《Opuscules》(『小品集』)のうち5つを翻訳収録し、また Pascal の詳細長大な biographie を訳載し、なおかつ Gustave Lanson, Ferdinand Brunetière 等のフランスの研究者による Pascal 寸評を訳出して、Pascal の全体像を紹介しようという意図を示している。

\*

### 1. 訳者について

前田長太は、明治期の日本カトリック教会においてもっとも精力的に活動した神父の一人であった。明治期のカトリック布教について綿密な調査研究の結果を発表している南山大学助教授青山玄神父は、前田長太の経歴を次のように記しておられる。「バウロ前田長太(1866—1939): 慶長 2 年 12 月 25 日新潟県北蒲原郡加治村に生まれ、明治 11 年 4 月 21 日新潟でドルワール神父より受洗す。27 年 9 月 25 日、ルカ外岡金声神父とともに

に東京教区最初の邦人司祭に叙階される。34 年以来、リニエール神父、ルモワヌ神父らと協力して文筆活動に従事し、数多くの論文、著書を発表する。ペン・ネームとしては、越嶺、城北道士、城南道士、越路の雪、雪湖など、いろいろの名を使用す。40 年結婚して司祭職から離れ、〔明治 42 年 4 月より外務省翻訳官をつとめ〕、のち〔大正 5 年 4 月 1 日より〕慶応大学教授〔文学部哲学科・ラテン語およびフランス語担当〕となる。昭和 14 年 11 月 1 日浦和で永眠<sup>(4)</sup>〔 〕内は筆者（広田）の補記）。神父としての前田長太は、すでに『一年有半の哲学と万世不易の哲学』<sup>(5)</sup>、『平民哲学死』<sup>(6)</sup>、『哲人の文章美』<sup>(7)</sup> 等の著書を出版して、布教目的のためとはいえ、西洋哲学についての造詣の一端をのぞかせていたが、不惑の齢を越えてから人生の転機を迎えて、その後半生を、フランス語・ラテン語の教育と西洋思想の研究・紹介に献げることになる<sup>(8)</sup>。しかし、司祭職を離れた後の前田長太は、いぜんとして正統的カトリック信仰を堅持していた<sup>(9)</sup>。たとえば『パスカル感想録』の「例言」の中にも次のような文章が読まれる。「吾人は其の何かを信ずるに当りて、人を信ぜんよりも、寧ろ神を信ぜんと欲する者なり、吾人は唯物主義の信者にあらず、特に自惚の甚しき自己信者とならざらんことを務むる者なり、此点より見てパスカルが神を信じて、天啓の真理と信仰の光とに照らして、千古の謎なる人生問題を解決したるは、大に吾人の意を得たりと云ふ可し、吾人は寧ろ此の点に於てバ氏の自称学者と大に其撰を異にせる学者なるを見、科学的知識の進歩に誇りつゝある今の人々には最も注目すべき人物なりと信ずる者なり。／＼遮莫、吾人はパスカルの言を以て悉く真理なりとする者にはあらず、パスカルは文豪として、哲人として、特に思索家として大いに敬重すべき人物なりと雖、

不幸にしてジャンセニズムに陥り、幾分か懷疑主義を賛し、尚厭世主義に傾きたるの嫌あれば、吾人の学び来れる哲学及び神学より見て、謬論謬説と思はれ、少くとも矯激の議論と思はるもの少しとせず……」<sup>(10)</sup>

この文章は、Pascal の思想の一面を適確に言表していると同時に、前田長太の思想的基盤が正統カトリック信仰にあることを示している。Pascal の《Pensées》翻訳にあたって、前田長太が行なった準拠原典の選択、断章の構成配列等は、このような彼の思想を無視しては正しく理解することはできないであろう。

## 2. 翻訳準拠原典について

前田長太は「例言」において、次のように述べている。「……感想録の原書には種類甚だ多くして、編者により各々其の順序を異にすれば、余は何れの原書に従わんかと思案中、幸にも偶々上智大学所蔵の珍書を見るを得たれば、大体は此の珍書に基き、尚他に二三種を参照して、其中最も秩序的に編せられたるものに従ひたり」<sup>(11)</sup>。ここで述べられている「珍書」、そして参照された「二三種」の éditions, また「其中最も秩序的に編せられたるもの」とは何を指しているのであろうか。

『パスカル感想録』の内容を一瞥することによって、前田長太が使用したことが明白にわかる éditions は次の二種である。

- A. *Pensées de B. Pascal*. (édition de 1670). Paris, Flammarion, S. d.〔1905〕  
(いわゆる Port-Royal 版の複製版。以下必要に応じて por と略記する)。
- B. *Pensées de Pascal* publiées d'après le texte authentique et le seul vrai plan de l'auteur avec notes philosophiques et théologiques et une notice

biographique de Victor Rocher, chanoine d'Orléans. Tours, Alfred Mame et fils, éditeurs. 1873. Grand in-8°.

(通称 Rocher 版。以下必要に応じて **Roc** と略記する)。

前田長太がおそらく使用・参照したであろうと推定される éditions は次の二つである。

C. Blaise Pascal. *Opuscules et Pensées* publiées avec une introduction, des notices et des notes par Léon Brunschvicg. Paris, Hachette et Cie. 1897. in-16°. あるいは *Pensées de Blaise Pascal*. Nouvelle édition…… par Léon Brunschvicg. Paris, Hachette, 1904, 3 vol., in-8°. (いずれも通称 Brunschvicg 版。以下必要に応じて **BRU** あるいは **B** と略す。《Pensées》の断章に関しては両者の間にほとんど差異はない。また前者は、前田長太が翻訳を完了した大正三年一月までには六版を重ねているが、題名が二版以後《Penseés et Opuscules》となったほかは、各版の間にほとんど差異はない)。

D. *Pensées de Pascal*. Nouvelle édition

corrigée et augmentée. A Londres 1776. あるいは, *Eloge et Pensées de Pascal*. Nouvelle édition, commentée, corrigée et augmentée par Mr de\*\*\* [Condorcet] (いずれも通称 Condorcet-Voltaire 版。以下必要に応じて **CND** と略記する)。

なお、『パスカル感想録』六十九頁から九十三頁にわたって、Pascal とはまったく無関係の小篇が訳載されている。これは「西班牙バスカルの人生観」と題されており、前田長太がそえている端書によれば、「彼の西班牙のバスカルと称せらるゝ哲人(グルナード)の人生観」であるという。グルナードとは、16 世紀スペインの宗教思想家 Luis de Granada(1505—1588) のことであり、この小篇は、《Guida do Pecador》(仏訳: 《Guide des pécheurs》. In, 《Les Œuvres spirituelles de Louis de Grenade》 trad. par G. Giraud. 10 vol. Paris. 1658—1662) の抄訳である<sup>(11)</sup>。

『パスカル感想録』の目次と、使用原典との対照表を次に掲げる。

## 前田長太訳「パスカル感想録」目次

## 原 典\*

### 人生に就ての感想

#### 一. 人間の性質

por. 《chap. XXI. Contrariétés étonnantes qui se trouvent dans la nature de l'homme à l'égard de la vérité, du bon cœur et de plusieurs autres choses》. 全訳

#### 二. 人間の真相

por. 《chap. XXII. Connaissance générale de l'homme》. 全訳

#### 三. 人間の高貴

por. 《chap. XXIII. Grandeur de l'homme》. 全訳

#### 四. 人間の虚栄

por. 《chap. XXIV. Vanité de l'homme》. 全訳

## 五. 人間の弱質

**por.** 《chap. XXV. Faiblesse de l'homme》.  
全訳

## 六. 人間の不幸

**por.** 《chap. XXVI. Misère de l'homme》.  
全訳

## 七. 人間の倨傲

**Roc.** 《Apologie de la Religion. Première partie. Livre premier. Chap. Ier. § III. – Orgueil et amour propre, preuves et sources de misère》. 1, 4, 5, 12, 16, 17–19\*\*, 20, 21.

## 西班牙バスカルの人生観

Luis de Granada. 《Guida do Pecador(trad. fr. par G. Giraud 《Guide des pécheurs》, In. 《Les Œuvres spirituelles de Louis de Grenade》. 10 vol. Paris, 1658—1662)

## 宗教に就ての感想

## 一. 無神論者の冷淡を排す

**por.** 《chap. I. Contre l'indifférence des Athées》. 全訳

## 二. 真正なる宗教の印証

**por.** 《chap. II. Marques de la véritable Religion》. 全訳

## 三. 人生と原罪とによりて真正の宗教を証す

**por.** 《chap. III. Véritable Religion prouvée par les contrariétés qui sont dans l'homme et par le péché originel》. 全訳

## 四. 神人の冥合は不可能にあらず

**por.** 《chap. IV. Il n'est pas incroyable que Dieu s'unisse à nous》. 全訳

## 五. 理知の用とその承服

**por.** 《chap. V. Soumission et usage de la raison》. 全訳

## 六. 論証せざる信仰

**por.** 《chap. VI. Foi sans raisonnement》. 全訳

## 七. 論証に飽き果てて聖書を読み初むる人の心

**por.** 《chap. VIII. Image d'un homme qui s'est lassé de chercher Dieu par le seul raisonnement, et qui commence à lire l'Écriture》. 全訳

## 八. 人間の非理及び墮落

**por.** 《chap. IX. Injustice et corruption de l'homme》. 全訳

## 道徳に就ての感想

## 一. 世間道徳

**por.** 《chap. XXIX. Pensées Morales》– 1, 6, 8, 12, 27, 29, 41, 42, 32,.

**Roc.** 《Pensées étrangères à l'Apologie. Livre premier. chap. II. Nature de l'homme, singularité, faiblesse, misères》.– 4, 11, 13, 17, 21, 22.

**por.** 《chap. XXIX》.– 23, 19, 28, 22.

**Roc.** 《Apol. de la Relig. I part. Liv. I, chap. III, § II–Du peu de lumière qui reste à l'homme pour connaître la vérité. Des

puissance trompeuses》-9, 10.

**Roc.** 《*ibid.*, § III, I.-L'homme sans la foi ne peut connaître le vrai bien, le vrai bonheur》-3, 4.

**Roc.** 《*ibid.*, § III, II-La Coutume détermine les positions》-1, 2-3\*\*,

**Roc.** 《*ibid.*, § III, III-La Coutume fait la justice》-2, 3, 4, 5, 6, 7, 8.

**Roc.** 《*ibid.*, § III, IV-La justice et la force》-1, 2, 3, 4, 6, 7.

## 二. 基督教道徳

### 1. 邪欲

**Roc.** 《Apol. de la Relig. 3 ème part. Liv. II, chap. I. § I.-La concupiscence》-1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9.

### 2. 恩寵

**Roc.** 《*ibid.*, § II.-La grâce et la loi mosaïque》-3, 4, 6, 7, 8, 9, 10.

### 3. 信徳

**Roc.** 《*ibid.*, chap. II. § I-La foi》-1, 2, 3, 4, 5, 6.

### 4. 愛徳

**Roc.** 《*ibid.*, § II-L'espérance et la charité》-3, 4, 5, 6, 9, 11, 12, 13, 14.

### 5. 徳行

**Roc.** 《*ibid.*, § III.-Les Œuvres》-1, 2, 3.

## 人物に就ての感想

### 一. 哲学界の人物

#### 1. 哲学者

**Roc.** 《Apol. de la Relig. 1ère part., Liv. II, chap. I, § I.-Des philosophes en général》-4, 5, 6, 7, 9, 10, 13, 18.

#### 2. ストイシアン

**Roc.** 《*ibid.*, § II.-Des stoïciens -1, 2.

#### 3. ピルロニアン

**Roc.** 《*ibid.*, § III.-Des pyrrhoniens》-2, 7, 8.

#### 4. エピクテートとモンテー ギュ

**CND.** Article X.

### 二. 宗教界の人物

#### 1. 猶太人

**por.** 《chap. X. Juifs》. 全訳

#### 2. モイーズ (モイゼス)

**por.** 《chap. XI. Moïse》. 全訳

#### 3. 基督

**por.** 《chap. XIV. Jésus-Christ》. 全訳

#### 4. マオメ (マホメット)

**por.** 《chap. XVII. Contre Mahomet. -断章  
《L'Alcolm dit……》を除いた全訳

## 愛情に就ての感想

**BRU** (?)

## 貴族に就ての感想

**BRU** (?)

# 雑 感

- 一. 人生 **BRU** (?) -B. 399, B. 168, B. 174, B. 418, B. 358, B. 129, B. 125, B. 131, B. 162, B. 206, B. 216.
- 二. 信仰 **BRU** (?) -B. 257, B. 557, B. 259, B. 261, B. 264, B. 265, B. 267, B. 268, B. 270, B. 287, B. 279, B. 277, B. 283. B. 288.
- 三. 道義 **BRU** (?) -B. 293, B. 296, B. 320, B. 313, B. 11.\*\*\*
- 四. 趣味 **BRU** (?) -B. 25, B. 26, B. Appendice au fragment. 15, B. 15, B. 32,
- 五. 人智 **por.** 《Chap. XXXI. Pensées diverses》-23.
- 六. 奇蹟 **por.** 《Chap. XXVII. Pensées sur les Miracles》-1, 2, 3, 4, 7, 14, 15.

# 附 録

- パスカルの性行及び其の著作 **Roc.** pp. IX-LXXXIII.《Notice sur la vie et les ouvrages de Pascal》

# 断 片

- 死に就ての感想 **por.** 《Chap. XXX. Pensées sur la mort, qui ont été extraites d'une lettre écrite par Monsieur Pascal sur le sujet de la mort Monsieur son père》. 全訳
- 罪人の改心に就ての感想 **BRU** (?)
- 古今基督教者に就ての感想 **BRU** (?)
- パスカル感想録に対する仏国五大 (?)
- 文豪の批評

註 \* 断章番号の順序は、『パスカル感想録』の訳出順による。また、部分訳である断章が相当数あるが、これはとくに註記しない。

\*\* 二断章がまとめられて一断章として訳出されている。

\*\*\* この断章 B.11 は、「四.趣味」の中に含まれるのが内容的にみて妥当であるので、おそらく印刷上の誤りからここに置かれているのであろう。

上の対照表から、前田長太が Port-Royal 版と Rocher 版を主に使用して《Pensées》断章の翻訳を行なったことは明らかであろう。また、『パスカル感想録』の「雑感」の部「一. 人生, 二. 信仰, 三. 道義, 四. 趣味」に収められた断章は、その配列順序が Brunschvicg 版の断章配列にほぼ従っているようであるが、前田長太が Brunschvicg 版そのものに直接準拠したのか、あるいは Brun-

chvicg 版を底本にした、教科書版などの Extraits に拠ったのかについては、確定できない。

また、同書「人物に就ての感想, 上哲学界の人物. 四. エピクテートとモンテーギュ」は普通《Opuscules》の中に収められている、《Entretien avec M. de Saci sur Epictète et Montaigne》の要約であるが、テキストは, Condorcet-Voltaire 版の Article X.

の後半部である。しかしこれも何かの *Extraits* に転載されているものに拠って翻訳されたという可能性もあり、Condorcet-Voltaire 版が直接使用されたという確証を提出することはできない。「愛情に就ての感想」は、『Discours sur les passions de l'amour』の、「貴族に就ての感想」は『Trois discours sur la condition des grands』の、「断片」の部の「罪人の改心に就ての感想」、「古今基督教者に就ての感想」はそれぞれ『Sur la conversion du pécheur』、『Comparaison des Chrétiens des premiers temps avec ceux d'aujourd'hui』の全訳であるが、これもおそらく Brunschvicg 版に拠っているであろうと思われるが、その確証を提出することはできない。

『パスカル感想録』の最後に付されている「パスカル感想録に対する仏国五大文豪の批評」は、J. M. J. A. Prévot Paradol, Ferdinand Brunetière, Ernest Havet, Gustave Lanson による、Pascal についての短評であるが、これも翻訳原典を何に拠ったかは不明である。

さて、先に述べたように、前田長太は、上智大学所蔵の「珍書」にだいたい基づいて翻訳の作業を行なった、と記しているが、上の対照表を見れば、それが Port-Royal 版か、Rocher 版かのどちらかを指していることは確かである。この二つの版のうち、Port-Royal 版に拠っている部分がはるかに多いのであるが、前田長太が使用した、Flammarion 社の Port-Royal 版の複製版は、1905 年に発行された普及版であって、当時簡単に入手できたはずであり、「珍書」と呼ばれることは難しかったであろう。一方、Rocher 版は、1873 年に出版されており、しかも出版社は Paris ではなく地方都市の Tours であったことをも考え合わせると、

「珍書」としての資格は、Port-Royal 版の Flammarion 複製版よりは、はるかに大きいと言わねばならない。上智大学図書館に、前田長太が使用したと思われる Rocher 版が、現在も所蔵されていることも、以上の推定の裏付けとなりうるであろう。こう考えてくると、前田長太の言う「大体はこの珍書に基き」とは、おもに断章構成上の問題について述べたと解釈すべきであろう。事実、Port-Royal 版と Rocher 版の間には断章構成上大きな差異がひとつあるが、その点で前田長太は Rocher 版に従っているのである。Port-Royal 版は、まず「無神論者の無関心 *L'Indifférence des Athées*」、「真の宗教の証し *Marques de la véritable Religion*」など、宗教的な一般問題に関する断章を巻頭に置き、いわゆる人間学的考察——「人間の偉大さ *Grandeur de l'homme*」、「人間の空しさ *Vanité de l'homme*」、「人間の弱さ *Faiblesse de l'homme*」等についての断章を、ほぼ巻末に位置づけている。これに対して、Rocher 版は、「人間の描写 *Peinture de l'homme*」——すなわち「人間の偉大さ、悲惨さと低俗さ *Grandeur, misère et bassesse de l'homme*」、「人間の思い上りと自尊心 *Orgueil et amour-propre*」などに関する断章を、宗教的一般問題についての断章の前に位置せしめている。『パスカル感想録』は、この Rocher 版の構成に準拠しており、それに加えて、たとえば「人生に就ての感想」の場合に見られるように、Port-Royal 版には存在しない一章「人間の倨傲」を Rocher 版によって補加したり、「人物に就ての感想、上哲学界の人物」のように、Port-Royal 版には欠けている主題を、Rocher 版に拠って構成しているのである<sup>(11)</sup>。それゆえ、前田長太が、『パスカル感想録』の全体の構成のモデルとした「珍書」は Rocher 版であり、Port-Royal 版

は、彼が参照した「二三種」の版のうち、「最も秩序的に編せられたるもの」の一つと考えてよいであろう。

なお、以上のような翻訳作業の過程において、前田長太が、ある程度 *texte critique* を行なっていることを特記しておきたいと思う。Pascal が、《想像力》ならびに《法律》の主題に献げた長大な二つの断章 (B. 82 と B. 294) はいずれも部分的に省略されて、Port-Royal 版の chap. XXV 《Faiblesse de l'homme》に収められているが、これを前田長太は『パスカル感想録』の「人生に就ての感想五. 人間の弱質」の章の中に訳出している (同書、三十三頁～四十頁)。ところが、この二断章 (B. 82 と B. 294) の省略部分を、前田長太は同書「道徳に就ての感想 一. 世間道徳」の中で、Rocher 版に拠って訳出している (同書百六十三頁～百六十四頁。百六十六頁～百六十九頁)。

### 3. 『パスカル感想録』の性格

前田長太が『パスカル感想録』の翻訳を行っていた 1912 年頃には、すでに Léon Brunschvicg による科学的文献批判の画期的成果とみなされる、《Pensées et Opuscules》が普及していた。当時もっとも手に入りやすかったであろうこの édition を前田長太が手にしていたことに疑いを入れることはできないが、彼が翻訳のためにおもに使用したのは、*texte critique* の上からみて多くの疑問がある、Port-Royal 版と、Pascal の草稿に相当程度忠実であるとはいえ、Brunschvicg 版の厳正さとは比較にならない Rocher 版であった。この事実を、《Pensées》翻訳に当たった前田長太の意図がどのようなものであったかを明らかにしているように思われる。

前田長太が第一に意図したのは、Pascal の

《Pensées》の翻訳というよりも、むしろ、Pascal の思想の概要を、日本の読者にもっとも親しみやすい形で紹介することであった。それゆえ、『パスカル感想録』には、Pascal の小品、伝記等が収められており、また「仏国五大文豪」の Pascal 寸評もそえられているのである。そして《Pensées》の断章の取捨選択を見ても、日本の読者がとりつきがたであろう、高度に論理的な断章 (たとえば Port-Royal 版 chap. VII. に収められた《賭》の断章) や、とくに神学的色彩の強い諸断章 (《表徴 Figure》についての諸断章、新・旧約聖書の解釈に関する諸断章) は省かれている。このような企てのためには、約 1000 の断章をすべて収録し、しかも断章を論理的・機械的・純客観的に分類した Brunschvicg 版に拠るよりも、断章のテキストそのものは省略されていたり改竄されていたりするものの、Pascal の思想に初めて接する一般の読者には親しみやすい相貌をそなえている Port-Royal 版に拠る方が適当であると前田長太が考えたことはごく自然のことであった。つまり『パスカル感想録』の第一の性格は、日本の読者に対するパスカル思想のできるかぎりとりつきやすい紹介書という点に求められる。

前田長太が、Rocher 版に拠って全体的構成を計ったことから、『パスカル感想録』の第二の性格が明らかになる。Rocher 版の編纂者 Victor Rocher は、カトリックの神父であって、その édition のもっとも大きな特徴は、正統カトリックの教義から逸脱した面のある断章に、教会の立場からのきびしい批判的註解をほどこしている点にある。前半生において、日本カトリック教会の神父であった前田長太は、Rocher 版を彼の宗教思想ともっともよく合致するものと認めたのであろう、Victor Rocher の註を、彼自身の註

として、随処に記入している<sup>(12)</sup>。また Pascal の伝記を紹介するのに当たっても、Pascal の Jansénisme 思想に関して批判的言辭がこめられている、Victor Rocher の《Notice sur la vie et les ouvrages de Pascal》を忠実に訳出していることから、前田長太の Pascal 観がうかがわれる。けっきょく『バスカル感想録』は、正統カトリック思想と Pascal の思想との相違点を明確にしつつ、合わせてカトリック思想をもある程度読者に伝えようという、いわば布教的意図をも有していたのである。ここに、同書の第二の性格があると言えよう。Pascal とは無関係の「西班牙バスカルの人生観」が、『バスカル感想録』に収められていることも、このように考えれば説明がつくのである。

\*

前田長太が《Pensées》の断章訳出に当たって多くを負っている Port-Royal 版は、1570 年に初版が刊行された。この版は、Pascal の死後彼の部屋から見出された数多くの紙片に書きつけられていた《Pensées》を、近親者・友人たちが整理分類して、当時の読者たちにできうるかぎり親しみやすい形にととのえて刊行したものである。Port-Royal 版後、約一世紀を経て、1779 年 Bossut によって Pascal の既刊の断章を網羅した総合的な断章公刊の試み<sup>(13)</sup>がなされた。それからまた約一世紀間にわたる多くの研究者のさまざまな作業の後、Brunshvicg による、科学的で厳密精確な《Pensées》編纂が実現された。日本においては、前田長太の訳業の後、英訳からの重訳である加藤一夫訳『随感録』(大正 10 年)<sup>(14)</sup>、Brunschvicg 版と英訳本による柳田泉訳『バスカル感想録』(大正 12 年)<sup>(15)</sup>などの抄訳を経て、由木康先生に

よる、Brunschvicg 版《Pensées》924 断章の日本最初の完訳が、『バスカル冥想録』上巻(昭和 18 年)・下巻(昭和 23 年)<sup>(16)</sup>として公刊されることになる。〔完〕

## 註

1. これは Rocher 版(後述)から採られたものである。
2. たとえば『バスカル全集』人文書院、昭和 34 年、第二巻、「バスカル参考文献 IV. 日本におけるバスカル関係文献」をはじめとして、Pascal 《Pensées》の諸種の邦訳に付されている、文献目録の《Pensées》邦訳の第一は常に、前田長太訳『バスカル感想録』である。なお、串田孫一『フランス思想史』春秋社、昭和 25 年、pp. 219～221 に、前田長太訳『バスカル感想録』についての簡単な書誌学的記述があるが、原典等の問題については、「大体ボオル・ロワイヤル版により、異本を参照して編んだものと思われるが」とだけしか触れられていない。
3. 広瀬青波訳「バスカルのパンセ」は、雑誌『日本及日本人』524 号(明治 43 年 1 月 1 日)より 546 号(同年 11 月 15 日まで断続的に連載され、212 の断章(BRU. の断章数によれば 199)が訳出されている。
4. 『布教』(The Japan Missionary Bulletin)東京オリエンズ宗教研究所、昭和 47 年 4 月号  
青山玄「明治のカトリック愛知・岐阜県布教」p. 181, 註 8。
5. いずれも三才社、明治 34 年。
6. 通俗宗教談発行所、明治 37 年。
7. 『羅句語初歩独修』尚文堂、大正 14 年。  
ほかに語学教育上の著作二、三あり。
8. 大正元年に、『基督伝』博文館も公刊し

ている。

9. 『バスカル感想録』「例言」九頁～十頁。
10. 前掲書「例言」十一頁。
11. この小篇を、前田長太は、明治 34 年に、「羅句文学 哲人の人生観」と題して翻訳し、自家出版している。なお、《Guida do Pecador》は、慶長 4 年に、いわゆる天草切支丹本のひとつとして、《きや・と・へかとり》の題名の下に邦訳・出版されている。
12. 「上哲学界の人物 一. 哲学者, 二. ストイシアン, 三. ピルロニアン」は, Ro-cher 版の《Apolog. de la Relig. Première part. Liv. II. Chap. I. § I-Des philosophes en général, § II-Des Stoïciens, § III-Des pyrrhoniens》に構成と断章を借りている。
13. 『バスカル感想録』百七十一頁～百七十四頁, 百八十七頁～百八十七頁, その他。
14. *Œuvres de Blaise Pascal*. A la Haye, chez Detune, librairie. 1779. [A Paris, chez Nyon]. In-8°. 5 vol. Tome 2.
15. 東京 春秋社。
16. 東京 文明書院。
17. 東京 白水社。

追記: 本稿の作成にあたっては、日本におけるバスカル文献の詳細な調査を続けておられる増田良二先生に、全般的な問題について多くのご教示をうけた。また前田長太の経歴に関しては、前田陽一先生から貴重なヒントを与えられ、南山大学助教授 青山玄神父、外務省人事課尾本様からご教示を受けたので、ここに厚くお礼を申し上げたい。